

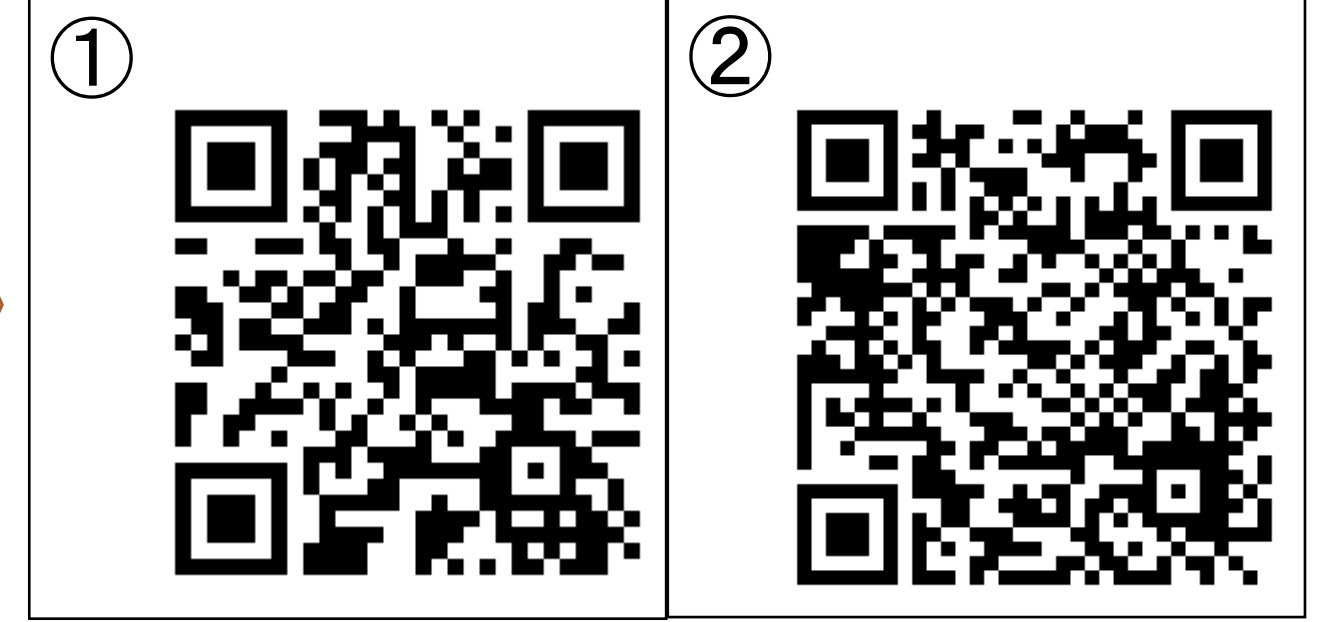
「読解」をめぐる国語教育のあり方に関する考察

国語教育における「読解」

一般的には筆者等の考え方や意図を、「正確に、または精密に」読み取ることが主眼としている。

「読解」をめぐる問題になっていること

詩歌や小説などの文学的文章だけでなく、本来客観的な読み取りが可能なはずの評論文等においても、筆者の意図と入試問題等での出題者の読み取り方に齟齬が出るケースがある。



大学入試過去問における出版社ごとの解答の差異

例① 東京大学の問題・・・出典：小松和彦『神なき時代の民俗学』，2002，せりか書房

出版社Aの解答例

- 問一. 日本人は生きていく限り、慰霊し祀らずにはいられない、死者の霊への負い目を常に感じていたということ。
- 問二. 戦死者の遺骨を収集しその霊を慰める行為は、筆者を含む日本人の、霊に対する民俗的信仰の自然な表れだから。
- 問三. 戦友の霊に対する申し訳なさが、生き残った兵士たちの人生の中でその後ずっとしこりになって残っていたということ。
- 問四. 死者の霊を祀る民俗的信仰のように見せかけて、内実は近代日本国家が軍国主義の称揚のために創造した儀礼だから。
- 問五. 遺骨を依り代としてその霊を祀ることは、戦中・戦後に国家主義儀礼という意味をもってはいたが、一方で死者の霊に負い目を感じてそれを慰め祀るという日本古来の民俗的信仰と合致し、それゆえにその後の日本で民衆の文化として定着したと考えられるから。

出版社Bの解答例

- 問一. 日本人は、怨霊に対してだけでなく、死んだものすべての霊に対して自分が生きていくことに負い目や後ろめたさを感じてきたということ。
- 問二. 日本人である筆者は、慰霊団の遺骨収集の儀礼を、日本文化に固有の「霊」への信仰の中に位置づけて解釈しているから。
- 問三. 人生の時間の経過に従って対象を変えていくはずの意識の一部が、戦死した戦友の霊に固定され、年老いた今でも生き残った後ろめたさを感じ続けているということ。
- 問四. 戦死者の遺骨を収集し故郷に持ち帰って祀る行事は、日本古来の風習ではなく、近代の軍国主義国家の創造物にすぎないから。
- 問五. 戦没者の遺骨収集は、それを政治的に利用しようとする思惑があったにもかかわらず、すでに死んだ者の霊に対して生き残った者が後ろめたさや負い目を感じて彼らの霊を慰めたいと思う、近代国家成立以前から存在していた日本人の心性と合致するから。

出版社Cの解答例

- 問一. 日本人は死者を恐れる心を持っており、自分が生き残ったこと自体が常に負い目を伴うものだったということ。
- 問二. 戦死者の遺骨を収集して祀る儀礼行為が、現在の日本人にとって伝統の信仰と結びついたごく自然なものとなっているから。
- 問三. 元兵士たちは生き残った申し訳なさから、死んだ戦友の霊だけを思い続けて、その後の人生を生きることとなったということ。
- 問四. 遺骨収集は、近代の軍国主義国家が民衆の信仰心を変形させて、戦死者を「英霊」に祀り上げる儀礼を装ったものにすぎなかったから。
- 問五. 遺骨収集という異郷で横死した人々の霊を呼び戻す儀礼行為は、たとえ戦中および戦後の日本国家の政治的意図によるものとしても、生者が死者への負い目をもつ日本人にとって、霊を鎮めたい民衆の気持ちに合致し、自然な行為として定着したと考えられるから。

問題によっては解答の内容に開きが大きく、どれが本当に正解なのかが分からないことも少なくない。

例② 京都大学の問題・・・出典：大庭みな子「創作」（『大庭みな子全集 第12巻』〈虹の橋づめ 創作〉所収）

出版社Aの解答例

- 問一. 筆者の文学世界は、これまでに巡り会った、普段は寡黙に暮らすごく普通の人びとが何気なく呟いた言葉を貴重な源泉として築いたものだということ。
- 問二. 芸術家の独創性とは、他人と違う習性を身につけるところにあるのではなく、周囲の人々の生活や人生に生命を感じ表現できることにあるということ。
- 問三. 人びとが真剣に向き合う日々の生活における出会いやそこに生じた出来事で、芸術家においては作品へと結実していく核となるものを包み込んでいるもの。

出版社Bの解答例

- 問一. 作者の文学は頭の中で創り出したものではなく、人々がふだんの生活の中で本心から発する真実の声を拾い上げることによって成り立つものであるということ。
- 問二. 芸術家に必要なのは、昼間寝て夜中仕事をするといった珍しい習性ではなく、普通の生活の中に潜んでいる生命の輝きを掘り出して表現することであるということ。
- 問三. 芸術家にとって創作意欲をかきたてたり作品の素材を提供してくれたりする、普通の人々の飾らないありのままの生きざまや、彼らの本心から発する真実の言葉。

出版社Cの解答例

- 問一. 言いたいことを言えずに口ごもって生きている人びとが生活の中でふと呟いた心を打つ言葉の中にある「自然」の生命が、筆者の文学の源泉になるということ。
- 問二. 芸術家に必要なのは、自らが風変わりな生きることではなく、個々の人びとの独自の人生に反映された「自然」が内包する生命を発見し表現することであるということ。
- 問三. 「自然」とは、存在の本来のあり方であり、個々の独自の人生を生きる人びとの生活に反映され、芸術家が作品を創造する際の根源となる本質を内包するものである。

果たして、これは国語教育として妥当なのか・・・？

考察

国語教育上の読解・・・筆者・著者・作者・登場人物等の「真の意図や気持ち」を読み取ることではない。
→授業者・出題者の文に対する「読解」がまずあり、それと同じ「読解」が生徒・受験生にできるかを学力評価のための「問い」としているもの。言い換えると「授業者・出題者と同じ読み取り方が生徒や受験生にできるか」で、学力を測るもの。

一切不要というわけではないし、評論文や実用文においてはあっても良いだろうが、それでも過剰に授業者・出題者視点からの「正確さ」や「精密さ」を求めるのはどうなのだろうか？また、詩歌や小説などの文学的文章に関する学習では、むしろ害悪ではないのだろうか？

国語教育における読解やそれに関する「問い」のあり方を見直す時が来ている！！